

知的障害特別支援学級における「見ること」に
視点をあてた「描くこと」の指導

宮村奈々江・浦崎源次

群馬大学教育実践研究 別刷
第28号 193～202頁 2011

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

知的障害特別支援学級における「見ること」に 視点をあてた「描くこと」の指導

宮村 奈々江¹⁾・浦崎 源次²⁾

1) 群馬県榛東村立榛東中学校

2) 障害児教育講座

Instruction of “drawing” with emphasis on “looking”
for children with mental retardation in special class

Nanae MIYAMURA¹⁾, Genji URASAKI²⁾

1) Shinto Junior High School

2) Department of Education for Children with Disabilities

キーワード：特別支援学級、知的障害、美術教育

Keywords：special class, children with mental retardation, art education

(2010年10月29日受理)

1. はじめに

知的障害特別支援学級（以下、知的障害特学と略記）は、教育課程編成に際して、制度上さまざまな問題を抱えている。一つには教育課程編成に関する規定のあいまいさがある。特別支援学級（以下、特学と略記）が小学校や中学校の一学級である限りは、建前としては小学校（中学校）学習指導要領に準拠しなければならない。しかし、特学に在籍する児童生徒は、それらの学習指導要領を適用することが困難であるからこそ特学に在籍しているのである。そこで自立活動を取り入れたり、下学年の教科の目標・内容を取り入れたり、知的障害特別支援学校の各教科を取り入れるなどの教育課程編成上の特例が認められている¹⁾。どのような教育課程を編成するかは学校や特別支援学級担任（以下、特学担任と略記）に任されているが、必ずしも児童生徒の実態に合っていない事例も散見される。知的障害児教育に不慣れな特学担任が少なくないことも一

因であろう。

二つには学級編成の問題がある。一般に小学校や中学校の学級は同一年齢の児童生徒で構成されるが、特学は異年齢集団であることが多い。異年齢集団に対して1つの教育課程を編成すると当然、子どもの実態に合わなくなる。特学では一人一人の児童生徒に対して異なる教育課程を編成せざるをえない。さらに、近年は、特学の児童生徒が通常の学級に出かけて障害をもたない児童生徒と一緒に授業を受けることが多くなってきており、その結果、特学では授業ごとにメンバーが異なり、学級としての授業づくりが困難になってきている。

中学校の特学の場合、加えて学級担任制と教科担任制の問題もある。中学校は教科担任制によって授業が営まれているが、特学担任は自分の専門教科のほかに小学校の学級担任のように複数の教科を担当したり、生活单元などの「領域・教科を合わせた指導」を担当することが多い。この場合、中学校の特学は教科担任

制と学級担任制が混在する指導体制となる。特学担任という存在は中学校という組織の中ではあくまで例外であり、時間割作成などに困難が伴う。そのため、担当授業時間数の少ない教科担任は特学の授業を担当するが、授業時間数の多い教科担任は特学の授業は担当せず、その教科は専門外の特学担任が担当するというように教科担任の持ち時間の調整に利用されることもある。極端な場合、国語の教員が特学では数学を担当したり、特学担任は通常の学級では専門教科を担当するが、特学では専門教科以外を担当するというようなことすらありうる。

このように、中学校の知的障害特学における教科別の指導の実践には困難が伴う。本稿は、美術を専門とする特学担任と美術担当の教員のTTによる美術教育実践の報告である。

知的障害特学における美術の授業では、何かを見て形や色を似せて表すような活動はあまり実践されていない。それよりも、自由に思い描いた通りに作ったり、今現在好きなモチーフを思いきり描いたりした方が、子ども達にとって分かりやすく、お互い楽しく取り組めるからである。しかし、新入生のCさんが「一学期の目標」を「えがじょうずになりたい」と自ら設定したこと、「恐竜なら描けるけど、人の顔は描けないよ」

といていた3年生のBさんが「お母さんの絵を描いてプレゼントしたい」と話したことをとらえて、「対象をよく見て描く」という活動に取り組んだ。

手本や対象を「よく見て（描こうね）」などとよく言うが、「見る」ということは物理的に視点を合わせることだけでなく、「認知する」「判断する」といった知的な働きが含まれ、知的障害児には難しい課題である。1つの物が見る位置や角度によって異なる見え方をし、場所や環境によってその陰影が変化する。人物は、服装、髪型、姿勢、表情、動きによってさまざまな現れ方をする。それらを発見し、自分なりに表現することは、生徒たちに新しい世界を切り拓くことになると考えられる。

経過と結果の詳細は以下に示すが、短時間の授業を通じて、学級の3人それぞれに「見る力」と「表現力」の成長がみられた。

2. 教育課程と学級の実態

1) 教育課程

S中学校における知的障害特学の時間割を表1に示す。

本校には、知的障害特学と情緒障害特学があり、教

表1 平成22年度 1学期 特別支援学級 教育課程（時間割）

		月	火	水	木	金
朝の活動		アイロン	朝礼 or 体操	卓球	体操	卓球
1	教科	日生	【社会】	習字	【社会】	【社会】
	協力学級	[1-4 音楽]				
2	教科	日生	日生	日生	【理科】	日生
	協力学級	[3-1/2 体育]	[1-4 音楽]	[1-3/4 体育]		[3-1/2 体育]
3	教科	【数学】	英語	日生	数学	生単
	協力学級			[3-1/2 体育]	[1-3/4 体育]	
4	教科	道徳	生単	生単	〈美術〉	国語
	協力学級		[1-3/4 体育]	[3-1 音楽]		
5	教科	学活	体育	〈家庭科〉	作業学習	国語
	協力学級					(3年総合)
6	教科		各教科	数学	〈技術〉	数学
	協力学級			(1年総合)		(3年総合)

協力学級（網掛け）…協力学級の音楽、体育に特学生徒が参加する授業

【】の教科名 …教科担任+支援員

〈〉の教科名 …教科担任+特学担任+支援員

（）総合の授業 …「総合的な学習」のテーマや内容によって、参加する授業

日生（日常生活の指導）…「日生プリント」と呼ばれる基本プリント(特学担任の自作)と、生徒に合わせた学習ドリルに取り組む。

プリントは、日付・曜日・天気・氏名・計算・時計・その日の給食献立などを書く。

かっこなしの教科 …特学担任+支援員

務主任が各学期ごとに提案する全体案において、特学の生徒が所属している協力学級の「体育」「音楽」「総合」が決定する。各生徒の実態にもよるが、ほとんどすべての生徒がこの3つの科目について協力学級の授業に参加している。したがって、特学の授業は、在籍生徒が3人であっても、3人の時もあれば、2人や1人の時もある。

次に、持ち時数などを考慮した上で、各教科担当教師が知的障害特学で担当する時間が決定される。これを俗に「出授業」と呼んでいる。

特学担任は、出授業の時間と担当教師、協力学級へ参加する時間、「学活」「道徳」や出授業の教師がいない教科の授業（たとえば、今年度は「国語」や「英語」は特学担任が担当する）、「習字」「図書」など、子どもの発達に合わせて実施した方が良いと思われる学習、「日生」「生活単元学習」「作業学習」などのいわゆる「特例」にあたる学習などを特学の授業として配置する。その際、1週間28コマの中に、生徒の成長を考えた、日々の学級運営や学習の流れがスムーズになるような、バランスのよい教科配置を行うよう心がけている。

さらに、学習内容や学習の流れ、子どもの実態などを考慮し、「出授業の教師と支援員のみによる授業」、「特学担任と一緒に支援に入る授業」、「特学担任と支援員による授業」を振り分け、特学担任の空き時間を1日に1時間ほど確保することにしている。この時間は、様々な教材研究や事務処理などの仕事を行うことに活用している。1つの教科について複数の教科担任が出授業となる場合は、特学担任が内容や教材の調整を依頼することもある。知的障害特学における今年度の時間割では、美術の教科担任が1学期と2学期について1コマ配置された。特学担任（宮村）も美術の免許を所持しているが、美術の教科担任の教師を中心に進めることにしている。その際、学習テーマや学習内容の決定や、教材や支援方法の工夫などについては美術の教科担任と特学担任とが互いに意見を出し合い、生徒にとって最も適切かつ効果的と思われる内容を取り上げるようにしている。

2) 生徒の実態

今年度は、中学3年2名、中学1年1名、いずれも女子の3名で構成されている。

〈Aさん（中学3年、女子）〉

- ・広汎性発達障害（知的障害）、療育手帳B2（軽度）
- ・自由ノートに漫画やイラストを描くことが大好きで、小さな女の子が描くような記号化されたイラストを以前からくり返し描いている。
- ・姿勢を保持することや、正しい持ち方で鉛筆や毛筆を持つことが難しい。
- ・「はみ出さないで塗ろう」などのアドバイスを素直に受け入れることが難しく、反発が強い。

〈Bさん（中学3年、女子）〉

- ・ダウン症候群（知的障害）、療育手帳B1（中度）
- ・自由ノートにウルトラマンや恐竜のイラストを描くことが大好きで、最近ではディズニーキャラクターのステッチをよく描いている。チューリップなどは、小さい子が描くような記号のような絵になる。
- ・絵の具の使い方が上手で、水彩絵の具の混色をして、水の調節を行い、画用紙に美しく着色することができる。
- ・斜視があり、ノートや半紙に目を近づけすぎることがある。
- ・「お母さんの絵を描いて母の日のプレゼントにした」と自分から話した。

〈Cさん（中学1年、女子）〉

- ・知的障害、療育手帳B1（中度）
- ・自由ノートに絵を描くことが好きだが、2歳くらいの子どものような○に目があり、腕や足が直接生えている絵（頭足人）を描いている。
- ・右半身に大きな火傷痕があり、全身がこわばりやすい。座った姿勢は、骨盤が後傾して前にでてしまい、肩に力が入って猫背になる。さらに、文字を書く際や食事をする場合は右か左に体が大きく傾き、対象を横から見る姿勢になってしまう。

3. 授業の構想

1) テーマ「よく見て描こう」の設定

昨年度までは、「想像した動物を粘土で作ろう」というテーマで自由度を高め、Bさんの恐竜好きやAさんの女の子フィギュアなどを作品としたり、「榛東中夢のロングトラック」というテーマで4切り画用紙にそれぞれ自由な絵を描いたものをつなげて共同制作と

したりした。他には、紙を小さく切って台紙に貼っていく「貼り絵」や、お盆を彫って絵の具を塗り重ね、やすりで擦って下の色を出す「鎌倉彫風のお盆づくり」、「紙版画でカレンダーを作ろう」「和紙のランプシェード作り」「木工パズルを作ろう」など、様々な領域、素材を組み合わせてテーマを設定した。

しかし、必要だとは分かっている「対象を見て描く」活動を取り入れることは少なかった。「対象を見て描く」という活動は、そっくりに描こうとすればするほど、物の形や位置の相互関係など、空間を認知する能力と密接に結びついてくる。これまでも時々「春の花をかこう」など、短時間のスケッチを設定することはあったが、記号の世界から抜け出せないBさんや、絵画としての技術的なアドバイスを受け入れようとしなかったAさんを目の当たりにして、「今はここまで」とあきらめていた。

しかし、今年度は、「えがじょうずになりたい」、「お母さんの絵を描いてプレゼントしたい」と望むCさんとBさんがいる。「対象をよく見て描く」という活動の好機だと判断し、「よく見て描こう」を設定した。

2) 指導計画

①学習テーマ：「よく見て描こう」

②ねらい：対象のものをを見て、形の特徴をとらえて描くことができる。

③個々の目標

Aさん…対象の形の特徴をとらえて描くこと

Bさん…対象を見る時間を伸ばすこと

Cさん…絵を描く活動に慣れること

④指導期間：平成22年5月～6月（全5時間）

1時間目 花

2時間目 くつ

3時間目 人

4時間目 手（ゲー・チョキ・パー）

5時間目 1～4時間目のテーマから自由選択

⑤留意事項

それぞれに4Bの鉛筆とスケッチブックを用意する。鉛筆は教師がカッターで芯を長く削り出しておく。イーゼルは、検討の末、使用しないこととした。モチーフは簡単な花の鉢植え（植物）から始めて、体育館シューズ（物）、自分の手や支援員の先生（人物）へ

と発展させる。

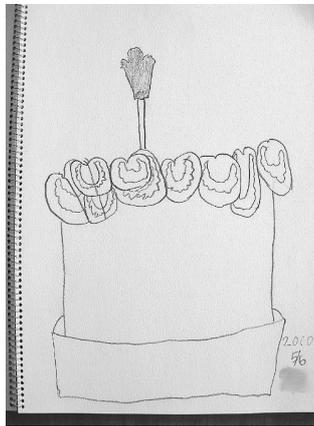
鉛筆の持ち方や姿勢について具体的に説明する。絵を描き始めたら静かに見守る。自信がなさそうな時はどこにつまづきを感じているかを判断し、一緒に対象を見て手を添える等の支援を行う。

描画の時間は20～25分ほどで区切る²⁾。彩色はしないこととし、各授業の最後に互いの作品を見たり頑張った点を発表し合ってまとめる。

4. 作品からみた授業の展開

1) Aさん（3年）の作品

①1時間目；シクラメンの鉢植え（15分間）

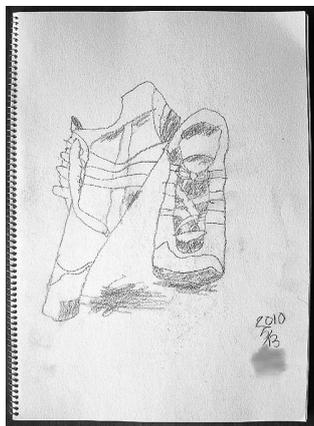


写真A①

Aさんは鉢の受け皿の部分から描き始め、鉢、葉へと下から上へと描いていった。受け皿の縁の部分を見ると、「円運動」（円形の物を斜め上から見た時に楕円形になること）と「形の重なり」を理解して描けていることが分かる。

葉を描くときは、葉の丸い形やその中の模様をよく見ていた。「となり合う葉の重なりも見えてごらん」とアドバイスすると、重なって下になっている葉も描いた。時間が足りなくて花は一つしか描けなかった。花は、真横から見た形で平面的にとらえている。

②2時間目；体育館シューズ（20分間）



写真A②

一組の体育館シューズを教師が重ねて置いた。Aさんは、片方が真横、片方が正面に見える位置を選んで腰掛けた。

靴全体の形を輪郭線で描き、「だいたいできました」と報告した。教科担任が「靴ひもやシューズのラインも見

てみよう」と指さすとラインやひもを描くことができた。再度「できました」と言ったが、教科担任が「影もあるよ。うす目で見ると分かりやすいよ」と伝えると、暗く見える部分を鉛筆を寝かせて暗く塗って仕上げた。

③ 3時間目；人物画（支援員の先生）（20分間）



写真A③

Bさんの「お母さんを描きたい」という希望もあることから、人物画に挑戦する機会を設けた。この頃になると、Aさんはスケッチブックを支えて対象を見ながら鉛筆を思い通りに動かすようになった。あまり言葉がけを必要とせず、集中して

いた。

前時と同様に、輪郭線を目で追って線の方向を決め、その通りに描いていくやり方で、全体の形をとらえて描き表していた。教科担任が、あごの下の首にできる陰影や、洋服のしわの暗い部分、内股の陰影などに気づかせることで、人物自体にできる「陰」を描くことができた。また、「座っている椅子もあるね」と伝えると、椅子の様子も描けた。

④ 4時間目；自分の手（各ポーズ7分）



写真A④-1



写真A④-2

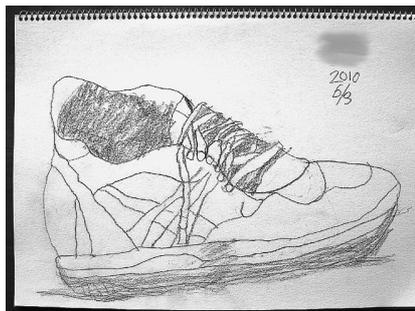


写真A④-3

「グー」「チョキ」「パー」の順で描いた。「グー」の指の重なりが一番多いため難しく感じたようで、「先生、小指が変になっちゃいました」と自分から話した。教科担任が「爪も描こう」「指の関節にしわや手相が見えるね」などと伝え、短時間のわりに細かく描いた。「パー」では特学担任が袖口を少し下げて手

首まで見て描くようにアドバイスした。

⑤ 5時間目；自由課題（①～④の課題から選ぶ）



写真A⑤

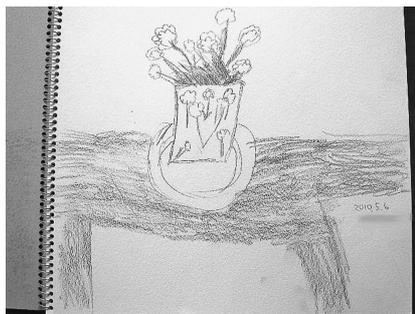
Aさんは迷いなく「体育館シューズを描きます」と選んだ。

2時間目の授業と同じモチーフでどちらもよく描け

ているが今回は1つのシューズを画面一杯に大胆に描いている点が大きな変容である。また、斜め上から見た視点に変わっており、足を入れる部分や靴底の厚みなど、全体的にふっくらとしたシューズの立体感がよく表れている。靴ひもやライン、陰影についてもより少ないアドバイスでより正確に表していた。

2) Bさん（3年）の作品

① 1時間目；カーネーションの鉢植え（15分間）



写真B①

Bさんは鉢の部分に描き、その上にカーネーションの茎、花の部分を描いた。花はくるくるとした曲線で表して

いる。

2～3個描いて手が止まったので、「もっとたくさん描こうか」と提案すると数を増やした。「下にお皿もあるね」と言うと「あ、そうか」と言って皿の部分を実上から見たような円形に描いた。

最後に「机も描けるね」と言葉をかけると、鉛筆をねかせて塗りつぶす形で机を描いた。やや時間を持てあまし、鉢にないはずの模様も描いた。

② 2時間目；体育館シューズ（20分間）

Bさんは、教師が重ねて置いた一組の体育館シューズを片方ずつ見て、その全体の形をとらえた。片方が



写真B②

もう一方の上に斜めに重なっている様子も描いた。その後足を入れる部分やひも、ラインや底の部分など細かいところ

に注目するよう言葉をかけると、いくつかの線を描いた。10分ほどでモチーフを見ることをやめてしまい、ねかせた鉛筆をさかんに動かして全体を暗く塗るような活動を続けていた。

③ 3時間目；人物画（支援員の先生）（20分間）



写真B③

Bさんの「お母さんを描きたい」という希望を考慮して人物画に挑戦する機会を設けたのであるが、実際始めると「難しいな」とつぶやくなど不安な気持ちを表していた。

あまり対象を見ないで描いていたようである。モチーフ（人物）までの

距離が2～3mと離れていてあまりよく見えなかった、あるいは人物の顔や体の関節など有機的な形に完全に不慣れだった、という理由が考えられるが確認されてはいない。顔の様子や手の様子はいつも自分が描いているイラストのように手足を伸ばして立っている姿である。口の形も逆三角形だったので、手をそえて唇を表した。

④ 4時間目；自分の手（各ポーズ7分）

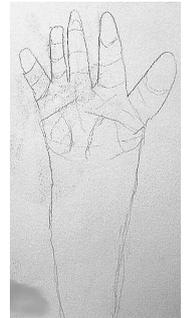
前の週にやや自信をなくした様子だったので、「グー」の時に特学担任がうすい線で指を握った時の主なアウトラインを描き、「だいたいこんな形になるはずだよ」と励ました。「なるほど」と言って爪やしわなどを描いた。「チョキ」では関節のしわや指の重なり方を細かく説明した。「パー」では自分で何度も手を確認して、しわや指を描いた。親指が一番短いことな



写真B③-1



写真B③-2



写真B③-3

どを伝えた。

⑤ 5時間目；自由課題（①～④の課題から選ぶ）



写真B⑤

Bさんは「花にする」と花を選んだ。この授業では、「グズマニア」という葉が多めのものを用意した。

鉢からまっすぐ太い茎を描いている。葉の様子も、細長い葉が上方へ向かって生える様子をよく見て描いていた。長い葉の方向が途中

中から下に向かっていていることを伝えると、「あ、本当だ」と言って下方へ向かう葉を描き足していた。この花は堅い葉のような質感の赤い花びらをもち、中心にめしべがあるのだが、それを星のような形を重ねて描くことでうまく表現していた。「ななめ上から見ると少し丸く見えるね」と鉢の縁を指さしながら伝えたところ、鉢を前回のように真四角には描かず、半円のような形で描いた。

3) Cさん（1年）の作品

① 1時間目；カーネーションの鉢植え（15分間）

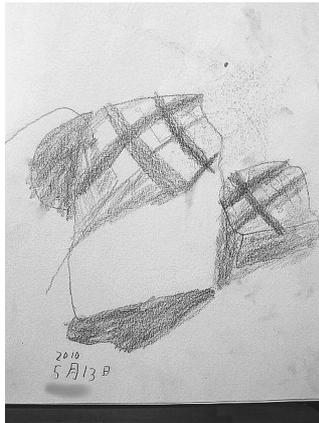


写真C①

Cさんはもともと行動がゆっくりで丁寧な生徒である。このときも、周りの様子を見ながらゆっくりと鉛

筆を動かした。自信がなくて、どのよう描いたらよいか分からない様子だった。「横から見ると四角に見えるね」「丸いお皿が下にあるね」などの言葉がけで、鉢と受け皿、花を2本描くことができた。絵の大きさは、画面に対してやや小さめだった。

② 2時間目；体育館シューズ（20分間）



写真C②

Cさんは、姿勢や鉛筆の持ち方に注意して授業の最初に教わった「えんぴつをねかせて動かすとやわらかい線が描ける」「えんぴつをねかせて動かすとかげなど暗い部分を塗ることができる」などを実行していた。

くつの全体の形よりも、くつのラインに注目したようだ。「くつのラインをよく見て描いたね」と伝えた。時間も短かったので、Cさんに全体の形を見させたり描かせたりすることは今回はしなかった。

③ 3時間目；人物画（支援員の先生）（20分間）



写真C③

などである。

最後に椅子の存在に気づかせたところ、Cさんは人への下のスペースに黒い物を描いた。Aさんがそれを見て「Cちゃん、それなあに？潜水艦？」と質問すると、Cさんは困って笑いながら黙っていた。特学担任が「椅子を描いたんだよね」と伝えてやると、Cさんはうなずいていた。

④ 4時間目；自分の手



写真C④-1

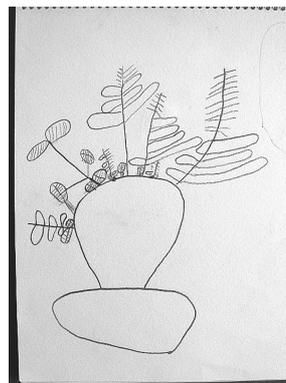


写真C④-2

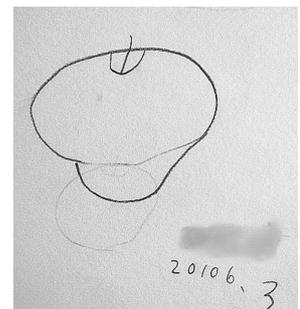
「グー」「チョキ」「パー」の3ポーズを予定していたが、Cさんは時間をかけて2つのポーズを描いた。初めに「パー」を描いた。部分と部分の長さを比べるのが苦手なCさんは、指の長さが短い手になってしまったが、親指の方向を他の4本の指と違えたり、指関節の線（しわ）を描いたりできた。

次の「チョキ」では、人差し指と中指を描いた時点で手が止まったので、親指や薬指、小指があることを示した。指と指が重なっていることの認識が難しい様子だった。

⑤ 5時間目；自由課題（①～④の課題から選ぶ）



写真C⑤-1



写真C⑤-2

Cさんは小さくてカラフルな可愛い「ケイトウの花」の鉢植えを選んだ。最後なので、「りんごも横に並べて描こうか」と提案するとうなずいてそれも描いた。

1時間目の授業に比べると、力強く堂々とした線で絵を描いている。また、茎が鉢から伸びて葉が生えている様子が描けている。花は葉の上部に何本も線を描き、繊維のような花であるケイトウをよく表している。

りんごは最初、横に平たい楕円形を描いた。「もう少しまん丸に近い形に見えないかな」と伝えると、楕円の下の部分を消して、円を描き足した。

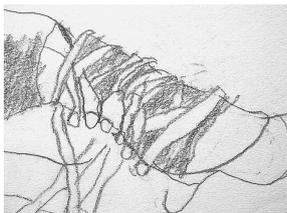
5. 生徒の変化

Aさんの変化は2時間目と5時間目の体育館シューズの絵に端的に現れている。

下の絵はAさんが描いた靴ひもと靴底部の拡大図である（左が3時間目、右が5時間目の絵である）。



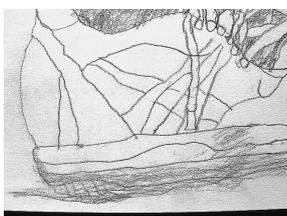
写真A靴ひも1



写真A靴ひも2



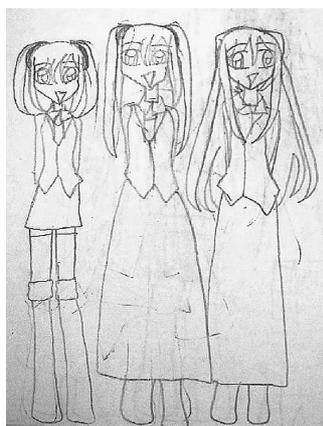
写真A靴底1



写真A靴底2

5時間目の靴ひもはより複雑な重なりとひも穴まで観察されている。同様に、靴底は単純な線から厚みや素材の感じまで表現されている。

人物画の変化は以前Aさんが描いていた人間（下の絵）と今回の人物図（写真A③）を比較すると顕著である。以前からよく描いていたイラストは、決まった



写真A以前の人物

パターンの髪型、大きくてキラキラと光る目、鼻と耳がなく、逆三角形の口、とがったあご、頭より狭い肩、後ろに回した腕や手、頭部より細い首、長い足、円柱状の足先が特徴である。

しかし、今回描いた人物は、後ろにまとめ

た髪型、鼻があり、上下の唇があり、首も頭部を支える太さもち、スカーフなどの服装を忠実に再現しようとしている。指の様子までは描けてはいないが、両手を重ねた様子はきちんととらえている。

Bさんは3時間目の人物が思うように描けないので不安な様子を見せたが、鉢植えの花や葉の表現では著

しい上達を見せている。手の描写でも指の重なりやしわを描くことができている。

Cさんには課題が難しかったようであるが、彼女なりによくみて描いているということはいえる。下図は

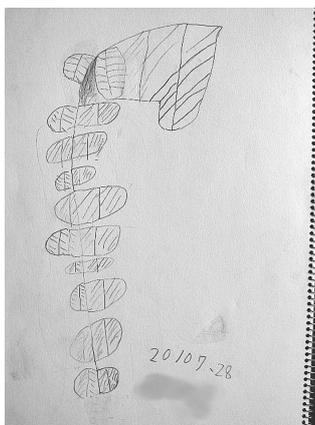


写真C以前の人物

彼女が授業以前に描いていた人物画である。

一見、同じような人物画に見えるが、Cさんは3時間目の人物画

（写真C③）において、目の周りのまつげ、目の中の瞳を意識して描いている。耳や首を描いていなかったが、授業では描くことができた。腕や足の様子も「見て描いた」といえるようなあきらかな変化を示している。



写真C朝顔

左の絵はCさんが夏休みに自主的に描いてきたあさがおの葉と花の絵である。

画面に大きくのびのびと描いている。茎が一本通り、そこから葉が出ている様子、茎がゆっくりとカーブし、花は横向きになっている様子が描かれている。

斜線のような線で葉脈や固有色（濃い緑）なども表現されている。この絵からも「見て描く」力の伸びを感じるができる。

6. おわりに

— 作品からみた「見ること」 —

それぞれの生徒の作品を見てみると、正味30分弱の5回の美術の授業ではあるが、その中で確実に変化していったことがよく分かる。今回、「描くこと」につなげるために「見ること」を重視して実践を行った。「見ること」に的をしぼって生徒に働きかけることで、「描くこと」に変化が表れたと言える。

Bさんにとって「見ること」は、空想の世界から抜け出して現実の世界を見つめることにつながった。空想することが大好きで、思いこみの強い傾向にあるBさんであるが、何かをじっと観察する学習を通して様々なことに気づいたようである。



写真B 動物

左の絵は6月の修学旅行で撮影した奈良の鹿の写真を見て、夏休みに描いた絵である。以前のBさんならば、鹿の模様を描いた四本足の体に、人の顔のイラストのような頭部をつけて「先生見て下さい。これは鹿です」と嬉しそうに報告していたと思う。

本実践のあと、夏休みに描いた絵は、草食動物の特徴である頭部の横に位置する目や足の蹄（ひづめ）まで生き生きと表現されていた。豊かなイメージとのびのびとした創造性をもつBさんが、今後「見ること」（＝観察すること）も身につけていけば、余暇の活動等の幅がより広がっていくであろう。

Cさんにとって「見ること」は、「そこに存在するもの（こと）」に気づくことにつながった。逆に、「存在していても（物体が重なっている場合など）見えない」ことがあるということも経験できた。形に対する認知が苦手なCさんだが、全体だけを見ていて分からなかったことが、一つ一つの形（部分）を「見る」ことで、理解できるようになってきた。このことは、たとえば数学の時間にはっきりと現れた。数学の時間に取り組んでいた「形パズル」では、以前は対角線や弧の向き、色のついた面がどちらに向いているかなど、すぐに混乱することが多かった。今では、見るべき部分以外を手などで隠したり、教師が自作した「枠つき透明フィルム」を図に重ねたりして、確認すべき線の方向や色の位置などを理解するのがとても速くなった。Cさんにとっては今後、右と左、上と下などの位置関係、物のある部分の長さ、それらの比、形の合成と分解などが「見る」ことで確認できるだろう。

Aさんにとって「見ること」は、美術指導の中で言うと、対象の形態を観察し、空間を理解することにつ

ながった。もちろん、規則正しい生活リズムの伴った基本的な生活習慣に支えられ、情緒の安定が図られていることが前提であるが、Aさんは3年生になってその基盤をしっかりと作っていた。おだやかな心と学習に対する高い意欲がベースとなり、集中して「見ること」が可能となった。そして、「見ること」が「理解すること」につながり、「描くこと」が上達する。上達した喜びが、Aさんをより一層奮い立たせ、またよく「見ること」へと導く。

このように、Aさんには「見ること」（理解すること）と「情緒の安定」（高い学習意欲）の高い相乗効果が現れたことが特徴である。生活全般、学習全般にわたって意欲が高まり、活動に対する教師の細かなアドバイスも「はい」とはっきり返事をし、受け入れるようになった。1年生の頃に取り組んだ「貼り絵」では、「この紙はちょっと大きいから、もう少し小さくちぎろうか」と教師に提案されると表情を硬くし、「どうしてですか。私はこれで良いと思います」と反発していたのが嘘のようである。細かい作業に集中する姿は以前から見られたが、他人から何か言われることを極端に嫌がるような様子があった。

今回の授業で、「見ること」を丁寧にとらえた指導を展開することで、Aさんの外界に対する理解が進み、自信もわいてきて、他人からの働きかけを前向きに受け入れるようになったことは、驚くべき人間的な成長だと言えよう。

たとえば、Aさんは習字の授業に強い苦手意識を持っていた。姿勢や筆の持ち方を注意されるし、筆圧をうまくコントロールできない。書き順を正しく書いた方が良いのは分かっているようであるが、間違えてもそのまま書いていた。「すばやく書いて終わりにしてしまいたい」そのような気持ちが表れているようだった。

次頁の左の写真は、2年生の4月に書いたAさんの習字作品である。「花」という漢字を半紙の中心位置に書くことができず、やや左上に寄っている。くさかんむりの最初の入筆は時間をかけてよくできているが、その他の一画一画はあまりお手本を見ないでサッサッと書いていったように見える。そもそも、画数の少ない「花」というお手本を選択しているところから、Aさんの習字に対する苦手意識が見て取れる。一方、「見ること」に重点を置いた美術の授業実践の後、3



習字A (2学年)

習字A (3学年)

年生の10月の習字作品（右の写真）は劇的に変化している。

継続する学習活動の中で少しずつ上達してきた習字だが、「見ること」のコツをつかんだとも言えるAさんの筆文字は飛躍的に変化した。まず、一画一画お手本を見て確認し、筆使いが丁寧になっている。また、教師のアドバイスを聞いてすぐに直そうとする意欲が見られる。「はね」「はらい」「とめ」などの筆使い、文字の美しいバランスに関係する画の太さ、長さなどについて、「こうするともっとかっこいい字になるよ」と伝えると、「はい」と言って取り組んだ結果が、このような作品である。

これらは一部の紹介にすぎない。「見ること」に視点を当てた「描くこと」の指導を通して、Aさんの見る力や描く力が伸びただけでなく、学習態度や生活態度までもがレベルアップしたことは確かである。「対象をよく見て描く」活動は、知的な活動であると同時に、大げさに言えば、その後の人生を変えてしまうほどの威力があると感じた。

最後に「見ること」についてまとめてみよう。美術教育における「見ること」とは、様々な情報をキャッチし、どのような形態をしているか、どのような空間か「判断すること」を意味している。具体的には、物や人の形を空間から分けるための輪郭線、長さ、高さ、長さの比などを判断して表す「形」、その物や人の持つ固有色や陰影などを判断して表す「色」がある。さらに、物や人の立体感、量感、質感など、また物や人が置かれている空間（位置関係や奥行き、遠近感など）を「見ること」で「判断する・理解する」ことができ、「描くこと」につながると考えている。

知的障害特学における美術の授業では、子どもの実態を考慮し、どの段階の美術学習をするのが適切か、どのように美術学習を展開していくかを判断しなければならない。通常の学級でも、美術嫌いの生徒が増えている昨今、「素描」や「自画像」などの学習活動では、パーツごとに観察させたり、立体のとらえ方を細かく伝えていく必要がある。絵を描く喜びや表現することの喜びを味わえるように、技術指導と心情面の指導のバランスをとりながら、支援していくことが重要であると考えている。

註

- 1) 文部科学省, 小学校学習指導要領解説総則編, 平成20年, pp30-31
- 2) 知的障害特学は給食の準備等に時間がかかるため, 4時限目は早く終了し, 給食の準備に入る. 美術は4時限目に設定されているため, 正味の授業時間は20~30分となってしまうことが多い.

(みやむら ななえ・うらさき げんじ)